
魔法少女リリカルなのは～転生？上等だよこの野郎～

魔王 なのは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜転生？上等だよこの野郎〜

【Nコード】

N9686Y

【作者名】

魔王なのは

【あらすじ】

主人公、現世で死んでりりなのの世界に行くことになりました。原作ブレイクしてやんよ！といったものです。テンプレです。初投稿なのでかなりあれですが、温かい目で見てください。アウトの人は見ないでね というわけでオリ主による原作ブレイクを始めましょうか。

第一話 これは・・・テンプレだー!! (前書き)

始めまして魔王 なのは です

初投稿なのでお目汚しになるかもしれませんがよろしく願いします。

では、どうぞ。

第一話 これは・・・テンプレだ!!

気がついたら真っ白な空間にいた・・・

「え・・・!? 何ここ!? あれか!? 今、流行の神様のミスで転生つてやつですか!？」

「そっだよ」

「・・・ものすごく緩い幼女ボイスが聞こえてきたぜ。俺も年かなア・・・」

「ちょ!急に老け込まないで!あと幼女つてなにさ!

おおっ・・・いい突込みだぜ。「姿が見えないけど・・・」

「あ、忘れてた。(ポン)これでいい?」

ピコーン!目の前に幼女が現れた!

選択肢 食べる

襲う

だ、誰だ!

「誰だ!!」

「はじめまして。私は神様だよ」

・・・テンプレ乙。

「で、その神様とやらが何のようだ。」

「うん、あのね。君がテトラポットから落ちて死んだから」「え。」「
・・・気づいてなかったの?」

聞かれて記憶を探る・・・思い出した。チンタ釣り行って海に落ちて溺れたんだった。

「おおっ、最初のほうに転生うんぬんいつてたのに忘れてたぜ。で、何で死んだんだ?」

「意外と冷静だね」。まあ、簡単に言うとな本当はあなたの隣の釣りが貴方を助けて死ぬ予定だったんだけど・・・」

まさか・・・

「部下がミスってその人と貴方の運命間違えちゃった」。ごめんね」

ひどくな、おい。しかも誤る態度じゃねえし。

「はあ、いいよ別にそこまで怒ってないし」

そう、俺は怒ってはいない。なぜなら・・・

「?なんで」

「決まってるだろ。退屈な人生なんざクソくらえだ」

「そっか〜。おこられなくてよかつた〜。あ、規則だから転生はさせてあげるね〜」

「（ニヤリ）それを待っていた!!」

我ながらいい性格していると思うが、まあ、間違えて殺されたんだからいいよね

「転生する世界と能力、あと容姿が決めるけどなにがいい？ちなみに能力は3つまでね」

3つか・・・ならば。

「じゃあ、転生する世界はリリなのの世界で。容姿は主人公と同年代ならば何でもいいぜ。能力は魔力をSSS+オーバーで。あと灼眼のシャナからシャナの武装と、天破壊砕を除く能力を存在の力ではなく魔力で使えるようにしてくれ。もう一つは・・・そうだなレアスキル『あらゆるものを切断し、接合する程度の能力』をくれ。」

「ん？もうちょいチートとかでもいいのに。まあいいけど。」

「十分チートだけだな」

「ん。わかつたよ〜。では、あなたの人生に神の加護を。いつてら〜」

パカッと床が割れた。

「やっぱりかあああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

こうして俺は転生することと相成った。

第二話 赤ん坊時代？もちろんキンクリだ！（前書き）

それではおついで。

第二話 赤ん坊時代？もちろんキンクリだ！

どうも、このたびめでたく転生した立花奏です。たちはかなで

転生したときはやっぱりというか赤ん坊だった。名前がわかったときなんかどこの某天使（偽）ですか

と突っ込んだ俺は悪くないはずだ。しかも、生まれた直後に母親が死んだときはどうなるかと思った。

え？冷たい？んなこと知るか。俺だって最初は悲しんださ。けど父親は蒸発しちまったんだよ。母親が死んだ直後に。え、なにそれ俺どうなるの？と思いましたがそこはあれだ。ご都合主義ってすごいね。

母親が結構いいところのお嬢様だったらしく、母親の父親、すなわち爺さんと共に預けられた。その後、まあそのなんとというかメイドさんやらに世話されたが・・・それは黒歴史だから封印しておこう。今は爺さんの下を離れて海鳴市の聖祥大付属に転入することとなっている。家はとある高級マンションの一室をもらった。というか家の爺さん、立花たちばな一刀は俺に激甘だ。どうやら俺以外に子供や孫はいないらしく、結構何でも俺の意思を尊重してくれた。そのおかげで俺は原作の始まる一ヶ月前にこちらへこれた。そして今日は転校初日だ。

今俺は教室の前にいる。先生から呼ぶまで待つようようにいわれたからである。そんな俺が願うのは唯一つ！

奏（なのは達と同じクラスになれますように！）

先「それでは奏君、入ってきてください。」

どうやら呼ばれたようだ。

奏「失礼します」

教室に入ると興味津々という目をいくつも受けた。

奏「始めまして。今日からこの学校に通うことになりました、立花奏です。どうかよろしく願います。」

と無難な挨拶をする。教室内を見渡すと

奏（いたー！）

なのは達三人娘がいた。ご都合主義万歳。

先「それでは席は高町さんの隣へ」

奏「どこですか？」

そう、俺の容姿はぶつちやけ灼眼のシャナのシャナなのだ。もちろん黒髪だ。ちなみに母親の名前がゆかりだったのは余談だ。

な「女の子じゃないの!？」

奏「俺は男だ!」

大体制服見ればわかるだろ!!

な「ご、ごめんなさいなの」

奏「……まあ、こんな容姿してる俺もあれなんだが……」

なぜか家の爺さんが髪を切らしてくれなかったのだ。理由を聞いたら、

爺「似合うから」

の一言で済まされた。

ア「アンタなんでそんなにかわいいのよ!男なのに!」

おや、この釘ミィーボイスは

奏「そんなこといわれてもなあ。てか誰?」

ア「あ、ごめんごめん。私はアリサ。アリサ バニングズよ」

アリサだった。なので……

奏「そうか、よろしくなバニング大尉。」

からかってみる事にした。

ア「誰がロートルの元不死身の第四小队隊長だあああああああ！
！！！！！」

おおつ、まさかこのネタに対応するとは驚いたぜ・・・

と、そのときちょうど二時間目を告げる予鈴が鳴ったのだった。

おまけ

す「あ、わたし月村すずかですヨロシクね。」

まともにはずかど会話をして癒されたそうなのであった。

第二話 赤ん坊時代？もちろんキンクリだ！（後書き）

第三話 原作開始！

あれからしばらくして原作開始の日となった。

デバイスと能力の確認もした。

万全の状態で挑もうと思う。

方針は一樣、一緒にジュエルシードを集める方向で進めることとした。

学校が終わり、なるべく意外性を出して脅かそうとさっ気が沸いてきたのですぐ帰ることとした。

そしてその晩。

ユ《助けて！》

奏（きた！）

ユーノが念話で助けを呼んだ。

奏「さあ、始めるとしますかねェ」

俺はデバイスを起動させる。

奏「いくぞ、ジャバウォック。セットアップ」

魔獣の名を冠した俺の相棒。

ジャ「(OK・My master・Stand by ready set up.)」

そうして俺の姿が変わる。髪がポニーテールになる。そしてB_Jはバリアジャケツトシアナが一番初めに着ていた黒の上下となる。その上に『黒衣・夜笠』を羽織る。

奏「いくか。」

そういつて俺は夜の街へと繰り出す。

現場についてみるとちょうど、なのはが変身する所だった。

な「レイジングハート！セットアップ！」

なのはが原作どおりのB_Jへとなる。その瞬間ジュエルシールドを内包した化け物がなのはへと襲い掛かる。

確認と、その者がなにをしに来たかを確認しに来たわけだが・・・
来て正解だったな。」

あらかじめ決めておいた設定を口にする。

ユ「助けられてありがとうございます。僕は・・・」

奏「待ちな。」

俺はユーノの自己紹介をとめる。

奏「自己紹介は後だ。今は・・・バインド（ボソ）」

俺は不意打ちしてきた化け物を止める。

奏「こいつをどうにかしないと・・・！」

そういつてジャバウオックを構える。

な「いやああ！！仕留めたんじゃないの!？」

ユ「そうだった！あれはジュエルシードというロストログアなんです！封印しないと！」

奏「そういうことか・・・ならば・・・！」

俺はジャバウオックを振りかぶり、

奏「ジュエルシード！封印！」

振り下ろす。その瞬間ジャバウオックから緋色の光線が飛び出し、

ジャ「(Jwersseed No.21・Silling)」

ジュエルシードを封印する。

奏「封印完了だ。」

俺がそういつと、

な「奏君すごいの！魔法使いなの！」

ユ「助かりました。本当にありがとうございます。」

奏「いいって。俺もロストログアなんて物騒なもの放置しておけないからな。あとなのは、俺は魔道士だ。」

ユ「積もる話は後にして早くここを離れませんか？」

奏「そうだな」

ユ「ノの問いに返答するとなのはが首を傾げ、

な「なんでなの？」

と聞いてきたので

奏「周りを見渡してみる。お前は警察のご厄介になるつもりなのか？」

そう返す。

な「あちゃああ。ボロボロなの。」

なのはの言つとおり、こちら一体は俺の撃ったマスパやらなんやらでボロボロになっていた。心なしかサイレンもかすかに聞こえる。

さっさと離脱するぞと二人に声をかけてその場を後にした。

おまけ

次の日の新聞を見たのはとユーノは大変汗をかいたそう。

第三話 原作開始！（後書き）

駄文ですいません。ちよくちよく更新するつもりなのでよろしくです。

今回は神社での戦闘を予定しています。

ではでは。

第四話　なのはも大概チートだよね　^^；

なのはが魔法に出会った次の日のことである。

ユ《それじゃあご実家の蔵にあったものを使っているんですか？》

奏《まあね。ただただ綺麗なペンダントだと思って触れたら起動してね。魔法のことはジャバウォックから聞いたんだ。》

な《へ〜、そうだったんだ〜》

ユーノとなのはと念話で自分のことを真実を交えて話していた。

奏《で、その中にロストロギアのデータも入ってたんだ。》

な《じゃあじゃあ！奏君もジュエルシード集め、手伝ってくれない？》

ユ《で、ですがこれ以上あなたたちを巻き込むわけには・・・！》

奏《アホか。巻き込まないつもりなら助けなんて呼ぶなよな。それにさ、ここは俺たちの町なんだぜ？》

な《そうなの！ご近所にそんな危ないものを放置しておくわけにはいかないの！》

奏《そうだ。それに俺達の知り合いがそれで怪我でもしてみろ、・・・
・自分が許せなくなるだろうな。》

ユ《し、しかし!》

なのはと俺は顔を見合わせて

『はあ〜』とため息をついた。

な《もうユーノ君だって知り合ってるんだよ?》

ユ《え?》

奏《つまりだ、お前はもう俺達の知り合いであり共にこの事件を解決しようとする同士だってことだ!》

ユ《あ・・・》

そう、幾らアニメの世界だからといって関わっちまったモンは放つては置けないだろう。それに・・・

奏《それに同じ戦場を駆けたんだ、だからお前と俺達はもう友達だろ?》

な《そうなの!だから私たちにもジュエルシード集め、手伝わして欲しいの!》

・・・俺が関わった影響だろうか?なのはがこの時点で覚悟を決めてることに驚きだ。

ユ《お二人とも・・・ありがとうございます・・・》

こうして俺たち三人によるジュエルシードの探索が始まった。

ついでに言いつと今は授業中である。

放課後のことである町を探索していた三人はジュエルシードが発動する気配を感じ取った。

な「!?!?ユーノ君!」

ユ「ジュエルシード!?!?この上です!?!」

ちょうど神社の石段の前を通りがかったときのことである。

奏「急ぐぞ！」

二人を急かし石段を駆け上っていく。

そして石段を登りきったその先にいたには

グルルルルルル……

ユ「な！現生生物をとりこんでいる！？」

ユ「の言うとおり、どうやら犬をジュエルシードが取り込んで暴走しているようだ。」

奏「！まずい、人が倒れてる。」

ユ「あの人の安全を最優先にします！」

奏「いい判断だ」

そう言っつて俺は飛び出していく。

奏「ジャバウオック！セットアップ！」

ユ「なのも変身を……！」

な「うん！レイジングハートセットアップ！」

俺となのはが変身する。

第四話　なのはも大概チートだよね　^^;（後書き）

やっちゃったぜ！と思わなくもないがまあいいか！

というわけで神社回でした。

後悔はしてない！

今回はvsフェイトで行きたいと思います。

あと、主人公の能力が未だにデカイ魔力しか出てませんが、時の庭園で一つ、Asで一つという感じにしたいと思います。

ではまた次回に乞うご期待！！

第五話　なのはVSフェイト！え？主人公は空気だろな

皆さんこんにちわ。

立花奏です。突然ですが今現在バスに乗っております。正直言おう。後ろのブラコンの殺気が痛いです。

バスに乗ってる理由は簡単、すずかちゃんのうちへご招待されることである。

一つ例外というか、忘れていたことといたしますか。実はなのはのお兄さんの高町恭哉とは初対面であり、極度のブラコンという原作知識をアカイアクマ並みのうっかりで忘れていたためである。

よって会って早々に「なのはに手を出す害虫め！」と切りかかってきた。もっとも、翠屋集合にしたため高町家最強のてによってOH ANASSIされていたが。

閑話休題

神社の一件から数日が経ちましたが現在のジュエルシードは6個となった。実はほとんどなのはとユーノに任せて俺は魔法の練習と能力の熟練を行っていた。

魔法はともかく能力はぎりぎりまで隠しておかないと俺がプレシアの標的にされる可能性がすごく高い。

てかされるだろう。なんせ俺の能力の一つ、『あらゆるものを切断し接合する程度の能力』はプレシアからすればのどから手が出るほど欲しい力だろうからな。某スキマBBA並みの反則な能力なのだから。

よって出来るだけなのはとユーノには隠すようにしている。まあ、時の庭園にいったら使う事になるだろうけどな。

さて、月村家に着き恭哉さんとすずかちゃんのお姉さんの忍さんといちゃつきながら出て行った。うん、これもいい。

だがおかし。失礼、だがしかし。

奏「なんでさ」

猫だ。何故俺にこんなにも猫が寄ってくるんだ?! おかげであら不思議、猫に埋もれた少年(見た目美少女)というなんとも言えないオブジェになってしまった。

いやマジで動けん。

ア「うわー、これはちょっと・・・」

な「なんというか・・・」

す「わー奏君皆と仲良しさんだね」

奏「アリサ、なのはそんなことはいいから助けてくれ。後すずか、何処をどう見たらそうなるんだ」

若干一名とんちんかんなことを言っていやがりますが断じて仲良くない。

なんとか猫を引っぺがしてもらいようやく椅子に座れる。ちなみに現在いるのはすでに外だったりする。

ん？室内では大丈夫だったかって？結論は簡単。食べ物に寄ってたかってこっちにあまりこなかった。

ア「にしても、あんたが来るとは意外だったわ。」

す「そうだね。いつも何かしらの用事でこれなかったのにな。」

奏「いやーまあ、そのーすまん・・・。」

な「にやはははは・・・」

す「あ、別に攻めてるわけじゃないから気にしないでね！」

ア「そもそもあんたがねえ・・・」

そのとき。

キ
ン

『!?!』

奏（なのは！ユーノ！）

な（これって!!）

ユ（魔力反応!?!）

な（ど、どうしよう!?!）

ユ（そうだ!）

そういつて？ユーノが駆け出す。

な「あ！ユーノ君待って！」

なのはがユーノを追って駆け出す。

ア「ちょ、なのは!?!」

す「行っちゃったね」

奏「悪い。俺も追いかけるわ。・・・なのは運動音痴だし（ボソ）」

『あ、あはははは・・・』

二人が力なく笑い肯定する。

奏「ちよっくらいつてくるわ」

そういつて俺も駆け出す。

SIDEなのは

わたしがユーノ君をおつてすすかちゃんのお家の森の奥深くへ向かうとそこには・・・

「にゃああゝお」

おっきな猫さんがいた。

な「ほえ?!」

吃驚してあいた口がふさがらない。

ユ「た、たぶんあの猫の大きくなりたいという願いが正しく叶えられたんだね……」

な「あ、あはははは……」

力なく笑う。

な「と、とりあえず封印しないとすずかちゃん困っちゃうの!」

あんな大きな猫さん飼えないもんね!

ユ「え。そういう問題?」

な「じゃあ、いくよ! ジュエルシー……」

ドカーン!!

封印しようとしたら横合いから黄色の魔力弾が飛んできたの!?

な「だ、誰?!」

飛んできた方を見るとそこには綺麗な金髪と綺麗な目をした綺麗な子がいたの!

?「ジュエルシード、いただきます。」

女の子が此方に斧のような杖を向ける。

奏「ジュエルシードは食べられないよ」

……雰囲気ぶち壊しの言葉を追いついてきた奏君がいったの。

女の子はその言葉に「へ？」と間の抜けた返事を返しました。ていうか

な「奏君……それはちょっとどうかと思うの……」

奏「気にするな。俺は手を一切出さないから一人であることめなよ。」

な「うん。勝つよ。」

そういつてその子と向き合った。

SIDE OUT

結果から言うとジュエルシードは持っていかれた。

なのはも原作よりは強いとは言え、実戦経験のないのはでは勝ち目はなかった。

あの女の子、フェイトテストタロッサ。あの子とその家族を救う。そのためには、さあパーティーの始まりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686y/>

魔法少女リリカルなのは～転生？上等だよこの野郎～

2011年12月13日10時52分発行